

中国狐文化の受容から見る日本人の女性観

北京外国語大学 潘 蕾

中日両国の人々にとっては、「狐」はよく知っていながらもあまり分からないものである。両国の実録、神話、物語、詩歌、小説などに登場する狐は、或いは動物の姿のまま、或いは人間に変身して人間世界に入り込み、手を尽くして人間と関わろうとしている。両国の数多くの描かれた狐の中に、若者もあれば年寄りもあり、美しいものもあれば醜いものもあり、善良なものもあれば凶悪なものもある。狐たちがたとえヒーローやヒロインでなくても、常に異様な光を放っており、さまざまな情報を伝えている。それらの情報はまさに人間社会に対するリアルな描写であり、文化理解におおいに役立つと思われる。

中国では、狐はもともと一部の部族でトーテムとされた動物であったが、漢代から符瑞天命思想の流行を背景に瑞祥の動物と見なされるようになった。ところが、魏晋南北朝時代になると、狐瑞に関する記録が未だに多く確認できる中、妖と化した狐も文学作品などにたくさん登場するようになった。魏晋南北朝時代の狐妖の中に、学識のある「胡博士」と美しく誘惑的な「阿紫」が最も個性あふれるものであり、この二者は後に唐代に現れた貞節を守る良妻の「任氏」と共に、中国狐妖の三大タイプとなっている。三タイプの中に、後に中国で一番発達したのは「阿紫」タイプの狐妖であり、『封神演義』に登場する妲己がその代表である。唐代以後、狐妖のほかに、狐神と狐仙も現れたが、いずれも狐妖ほど発達することはなかった。

一方、七世紀以来の中日両国の盛んな人的交流により、中国の狐文化は日本にも伝わり、遅くとも平安時代末期までにシャーマニズムや道教や仏教文化などと結び付けられた中国の狐文化がすでに日本に伝入したと思われる。日本では、中国から伝入した狐文化の中に、最も発達したのは狐神であり、狐神が稻荷信仰の一環としてすっかり日本社会に定着したのである。これに対し、「任氏」タイプの狐妖が発達したものの、中国で最も発達した「阿紫」タイプの狐妖はかえって中国本土ほどの活躍ぶりを見せることはなかった。

文学作品や民族誌などにおいては、上述した中国狐妖の三大タイプの中に、「胡博士」タイプの狐妖は基本的に年寄りの男性に化して現れるのに対し、「阿紫」タイプと「任氏」タイプの狐妖はいつも若くて美しい女性に化して現れている。このように、中国狐妖の大半は女性に変身でき、そこには人々の人間女性に対する考え方が投影されていると思われる。この意味では、各歴史時期に描かれた女性に変身する狐妖に対する研究は各歴史時期の人間女性に対する研究に資すると言えよう。

宋代以来の中国における「阿紫」タイプの狐妖の発達について、中国狐文化の研究者である李剣国氏が「それは当時の中国人女性の社会的地位の低下を背景と

している」(李剣国『中国狐文化』人民文学出版社、2002 など)と言及したが、中国人女性の社会的地位がどのような歴史変遷の中で低下し、女性の社会的地位の低下が当時の中国人の如何なる女性観を背景としているかなどの問題について、深く掘り下げてはいない。しかし、筆者から見れば、このような問題の検討なしでは中国における「阿紫」タイプの狐妖が発達する本当の原因を究明することはできない。一方、日本では中国伝入の「任氏」タイプの狐妖が発達したものの、「阿紫」タイプの狐妖がそれほど発達しなかったことについて、日本狐文化の研究者はあまり触れていない。筆者から見れば、これもやはり日本人女性の社会的地位及びその社会的地位の背景にある日本人の女性観を手掛かりに検討すべきである。したがって、本稿では、日本における中国狐文化受容の諸相を再検討し、それをもって日本人の女性観の一端を浮き彫りにしてみたいと思う。